

学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点

第 12 回シンポジウム開催報告

飯野 孝浩

東京大学情報基盤センター

1. ねらいと当日の運用

2020 年 7 月 9 日、第 12 回となる 2020 年度 JHPCN 拠点シンポジウムがオンラインにて開催された。事前に行われた課題審査委員会での議論により、今年度は規模を縮小し、1) オーラル発表は数を減らして実施、2) ポスター発表は、従来はオーラル発表であった課題と従来のポスター課題に拡張して実施、という形式で行われた。今年度からの新たなポスター発表の枠として、来年度に各拠点から提供される資源や取り組みについての発表、採択課題以外からの一般発表も公募された。さらにオーラル発表として、来年度以降の稼働が予定されているデータプラットフォーム(mdx)構想の発表がされた。それぞれの発表枠での発表数は以下の通りである。

- ・ 2019 年度実施課題の成果報告：オーラル 15 件、ポスター 43 件
- ・ 2020 年度採択課題の内容紹介：ポスター 52 件
- ・ 2019 年度年度実施萌芽課題の成果報告：ポスター 3 件
- ・ 2020 年度採択萌芽課題の内容紹介：ポスター 9 件
- ・ 2021 年度提供予定資源の紹介：8 センター
- ・ その他：オーラル 1 件、ポスター 2 件

オーラルセッションは Zoom を用いた同期型の実施とし、課題審査委員会が選定した 15 件について、午前と午後それぞれのセッションに 7 件、8 件と割り振った。その後にポスターセッションコアタイムを 1 時間 50 分設定するというスケジュールであった。

事前に強く懸念されたことは、ポスターセッションにおいてどのように議論の場を設定するかということであった。ポスターセッションの持つ、ポスターをザッピングしながら会場を歩き、参加者間でフランクなコミュニケーションを行うという形式をオンラインでいかに実現するかは難しい課題であり、知見が十分にあるとは言い難い。凝ったシステムを導入したものの不具合が続発してしまった学会、ポスターセッションの目的を果たせないとしてポスターセッション自体を中止してしまう学会もあり、事務局を悩ませることになった。

紆余曲折の末、広く用いられている業務用 SNS である Slack を使い、非同期・同期それぞれで質疑応答を行う、という仕様とした。課題ごとに 1 つのスレッドを作り、ポスターの PDF や関連動画ファイル等をアップロード¹し、質疑応答は当該スレッド内で行うという形式にした。Slack へのログインは前日までにほとんどの方が済ませてくれていたが、質問を該当するスレッドにて

¹ Slack へのファイルのアップロードや更新、発表者名・課題名の更新を人海戦術の手作業でこなしてくださった、研究支援チームの杉田さん、伊藤さんのご尽力のおかげで、本形式での実施が可能になった。当日もタイムキーピングなどの慣れない業務をこなしてくださったお二人なしに、今回のシンポジウムは実施不可能であった。改めて御礼を申し上げる。

行うという方式は一部で徹底できなかった。

オーラルセッションは Zoom のウェビナーモードで実施したため、運営・座長に大きな権限がある形式であった。質疑応答はすべて Slack の該当スレッドに事前に寄せてもらい、座長が選定の上で読み上げるという形式にした。Zoom にも発表意思を示す機能はあるものの、オーラルセッションのうちに Slack 上への質問投稿に慣れてもらいたいという意図であった。

シンポジウム参加登録者は 247 名であり、オーラルセッション中に観覧していた人数は定常的に 150 名ほどであった。登録者のほぼ全員が Slack にアカウントを作成していた。

2. アンケート抜粋

参加登録者を対象としてアンケート調査を実施したので、その結果の一部をここに紹介する。結果全体の紹介は今後のセンター広報誌 Digital Life (現在リニューアル中) を参照されたい。回答者数は 59 であった。

口頭発表の件数を大幅に絞った件については、昨年度までのように全課題にすべきという回答は 13.6%にすぎなかった。また、会期を 2 日から 1 日に短縮したことについても、否定的な意見は 32.2%と少数派であった。また、パラレルセッションの実施についても否定的な意見は 33.9%に過ぎなかった。

冒頭で触れたように、採択課題数の増大は、シングルトラックで全課題代表者に口頭発表をしてもらうという形式を不可能にしつつある。たとえ来年度以降に疫学的状況が劇的に改善していたとしても、シンポジウムの新たな形式を再び模索すべきときに来ていると言えよう。